
ファンタジーな異世界でドンパチなう！？

比叡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーな異世界でドンパチなう!?

【Nコード】

N8423Y

【作者名】

比叡

【あらすじ】

「あらすじ」

ある日、主人公藤崎達也はゲーム(MMORPG)のミッション中に突然仲間と共に謎の爆発に巻き込まれた。

そして、目が覚めるとそこは自分の部屋でもゲームの中の戦場でもなかった。目の前に広がるのは雄大な自然と黒煙を上げる大きな西洋城。

そう、主人公たちは異世界に叩き込まれたのである。後はお決まりの悪の組織から世界を救う冒険の始まり始まり() /

初弾装填

俺、藤崎達也はさっきまで自室で「operate would war?」(略してOWW3)というMMOFPSをしていた。FPSとは一人称視点で1人の兵士になりきり、マシンガンやライフルを装備し色々な戦場を駆け巡り戦うゲームで、MMOは複数プレイを表す。

昨日から高校の夏休みが始まったので、夕方からぶっ続けてプレイしていて、そろそろ日付が変わろうという時だった。

俺はゲーム内でも相棒と呼べる3人とミッションをしていた。

しかし、最後の敵を倒したのと同時にテレビ画面が真っ白になる程の爆発に巻き込まれ、目を覚ましたらここに居た。とりあえず状況確認しようと立ち上がり周りを見渡すと思わず息を飲んだ。

俺はどうやら芝の生えた小高い丘のてっぺんにいるようで、全包囲を深い森に囲まれていた。

『ここは……俺の部屋じゃないよな……。それにゲームの中でもなさそうだ』

最後にプレイしたミッションのステージは市街地で、OWW3にもこんなステージは存在しない。悪い夢でも見ているのかとお約束の頬つぺたもつねって見たが、勿論痛かった……………。

だが、その他は出撃した時のままだ。服装は迷彩服でしっかり武装も同じ物がある。

試しにサブアームのSIGを撃つてみたら、軽い反動と共に銃声がして足下の地面に小さな穴が空いた。

『……………おいおいマジかよ……………』

目の前に突き付けられた現実に俺はただ呆然としていた……………その時。

「おお〜い！タア〜ツヤア〜！！」

緊張感のない声が聞こえた瞬間俺の中にあつた不安や絶望がみるみる晴れていった。

『リヨウスケ！？ホントにリヨウスケか！？』

「YES my friend だぜ相棒」

こんな状況なのに意味も無く英語で答えるコイツのバカっぷりに俺は密かに安心していった。

『ところで後ろの二人は誰だ？』

俺の視線は相棒の後ろから歩いてくる二人の軍服姿の人物に向けられた。

一人はすらつとした体型で同い年ぐらいの女子で、もう一人は大学生ぐらいの優しそうな顔をした男の人だった。

「タツヤ少尉。上官の顔を忘れるとは何事だ！今すぐその役に立たない頭を風通し良くしてやるうか？」

「そうだよタツヤくん。酷いじゃないか（笑）」

明らかにな上から目線の罵倒に聞いていて清々しいイケボ。

『会長に宗さん！？やはり一緒に巻き込まれていたのか……………』

この二人はリヨウスケと同じく俺がゲームを始めた頃からの戦友で、苦楽を共にした「では、これからの行動を決めたいと思うのだが、皆意見は有るか？」

『それについてなんだが……………見てくれ。北の方に城みたいなのが見えるだろ？』

俺はポーチから小型の双眼鏡を取り出して皆に見せた。

『あそこまで行けば人も居るだろうし、ここについても何か解るかもしれない。』

「そうだな、今の私たちには圧倒的に情報が不足している。」

「オレも会長さんに賛成だよ。」

「僕もそれで良いと思う。」

かくしてとりあえず俺達の今後の方向性は決まった。

「そうだ！そうだそういえばオレ凄い事発見したんだけど！」

「何だ、リヨウスケ少尉？」

「ふふふ……皆、“メニュー”って念じてみてよ！」

俺達はリヨウスケに言われるままに“メニュー”と念じた。すると？目の前にOWW3で見慣れたメニュー画面が表れたではないか！

『……これは……まさか！？』

俺は素早く自分のステータスや装備、ミリタリーポイント（ゲーム内での金）やLvをチェックしてみたが、なんと最後にプレイした時のセーブデータそのままだったのだ！！

試しに弾薬補給を行ってみると、規定のMPが支払われ、弾薬が満タンになっていた……。

「ふむ、現実ではあり得んな。」

「やはりここは「異世界」なのでしょうか……。」

宗さんの「異世界」という単語に3人が押し黙る。

「うおお〜すげえ！プレデターまで呼べるぜっ！」

しかし、こんな状況にも関わらずマイペースなりヨウスケ。

「みんな何落ち込んでんだよ！ステータスも見ただろ？オレ達は今軽くそこいらの特殊部隊以上の性能なんだぜ？気楽に行こう気楽につ！」

『まあそうだな、ここで落ち込んでもらちが開かない。行きましよう会長。』

「隊長と呼べ隊長と！」

そして俺達4人の異世界での長い旅が始まった！

初弾装填（後書き）

誤字脱字等があれば知らせて下さい m () m

登場人物設定（前書き）

メイン登場人物とそのステータスです。

登場人物設定

登場人物

本名：フジサキ・タツヤ藤崎達也

LV：54

階級：少尉

HN：タツヤ

兵科：デュアルアタッカー

主武装：MP7A1 デュアル

アクセサリ：ホロサイト・ACOGサイト・ロングマガジン

副武装：SIG 226 デュアル

アクセサリ：レーザーサイト

スキル：移動スピードアップ

本名：タカギ・リン高木凜

LV：64

階級：大尉

HN：リン

兵科：コマンドー

主武装：SCAR L

アクセサリ：フォアグリップ・ホロサイト

副武装：ベレッタM92F

スキル：支援物資強化

本名：ヨシダ・リョウスケ吉田亮介

LV:52

階級:少尉

HN:リヨウスケ

兵科:マークスマン

主武装:SR 25

アクセサリ:サブレッサー

副武装:USP

アクセサリ:サブレッサー

スキル:弾道安定

本名:クドウ・ソウイチ
工藤宗一

LV:58

階級:中尉

HN:ソウイチ

兵科:ガンナー

主武装:M249 SAW

アクセサリ:フォアグリップ・ACOGサイト

副武装:デザートイーグル

スキル:高速リロード

第一撃（前書き）

やっとドンパチがはじまります（笑）

第一撃

俺達4人はさつき決めた通りに北に見えた城に向かう事にした。

幸い包囲磁石がポーチの中に入っていたので、迷う事は無いだろう。

しばらく歩くと、やや開けた場所に出た。どうやら道らしい。

「おお、ようやくマトモな道を歩けるわあ」

「そうだな、この道を辿れば城の方にも着けるだろう」

「いやあ良かったです。ここも人が通る事が分かって」

三人ともこっちに来てから初めて文化的な物に触れて安心したようだった。

そこで小休止をとろうとした時だった。

《ドオオオン!》

突如北の方から爆音が響いてきた。

『一体何だっ!?!』

俺は立ち上がりながら得物のMP7A1の安全装置を解除した。

「ちよっと待ってな。今確認するから」

リョウスケが言うと近くの木に登り、SR-25のスコープを使

って爆音の聞こえた辺りを索敵した。

「リヨウスケ少尉、確認出来たか？」

「ちょっと待って下さいって！会長さん！」

「だから隊長と呼べと言っとるだ………」

「あつ、見えた！戦闘してるぞ！」

『詳しい状況は分かるか？人数や装備とか……』

「………どうやら撤退中のところを追撃にあってるみたいだぜ。でもあの分じゃ撤退と言つより落ち延びと言つたり方が正しそうだ。ボロクソやられてるぜ………酷えなこりゃあ………」

「落ち延び？………まさか！少尉、城は見えるか？」「………くそつ、煙り上げてやがる………」

『間違い無いな。その落ち延びてる集団はあの城から逃げてるんだ』
この時点で当初の俺達の目的はものの見事に崩れ去った訳だが、今はそれどころではない。

「………で、これからどうしましょうか？ここから逃げるのか。それとも戦闘に介入するのか………」

そつだ。宗さんの言つとおり、今はこの状況をどうするか、だが………。

「そこは介入だろ！オレ達なら楽勝だって！無論撤退側な！そんで

もって救世主だ！ヒーローだ！そんでもってヒロインとフラグをバキバキ建ててやる！」

リヨウスケは一人燃え……………もとい萌えていた……………

「僕としてはヒーロー云々は置いておくとしても、やはり追われているのを傍観するのは些か気が引けますね……………」

宗さんも追われる側を助ける方に賛成のようだ。

『俺も追われてる方を助けるのに賛成だ』

俺もやはり賛成の意見を述べた。

「よし、決まったな。これより我々は戦闘に介入する。各員セーフティを外せ！暴れるぞ！」

「『了解！』」

こうして俺達は救援作戦を開始した。

……………まあ、作戦と言っても単純な突撃だが

目的地には直ぐに着いた。しかし、状況は思っているより悪かった。

移動手段の馬車は燃えていて、30人程に完全に包囲されている。護衛の人数も残り数人だった。

「すぐに救援を開始する！リヨウスケ少尉はここから援護射撃。宗さんは護衛対象の確保。敵は私とタツヤ少尉で蹴散らす！GOGO

GO!!」

俺達は各々行動を開始する。リヨウスケは適当な高所に陣取り脅威度の高い敵から狙撃していく。普段はノロノロしているがリヨウスケの狙撃は一流だ。的確にヘッドショットを決めて敵の数を減らす。

宗さんは護衛部隊長と思われる人の所へ行くと、状況を説明する。そしてM249を構えて制圧射撃を開始した。こちらも全くと言って良いほど無断弾が無く、流石古参兵という感じだ。

俺と会ちよ……じゃなくて隊長も負けじと敵の集団に突撃していく。

隊長はSCAR-Lのバースト射撃で敵兵を確実に無力化していく。俺もMP7デュアルで弾幕を張りながら無数の敵に大量の4.6ミリ弾を叩き込む。

「くそつ、敵の増援か？ たった4人で何が出来る！ こっちは30人も居るんだぞ！ 早く蹴散らせっ！」

……と敵の指揮官のものらしき怒号が聞こえるが………完璧な死亡フラグです。本当にありがとうございましたwww

俺と宗さんの弾幕で敵を釘付けにして、隊長とリヨウスケが的確に無力化する。

戦闘はものの5分で終了した………。

「て、撤退だ！ 撤退するっ！」

敵の指揮官が尻尾を巻いて逃げていった。漫画やアニメでよく見る光景だが、実際見ると結構笑える。

俺達は敵を蹴散らすと護衛対象の元に集まった。どんな奴か分からんが、折角助けたのだからこれから色々質問しなければならぬ。

護衛対象の元には宗さんが居た。既に話をつけてくれているみたいだ。流石頼りになる。

「皆さんお疲れ様です。こちらは部隊長のグライアンさんです。」

「私が護衛部隊長のグライアンだ。今回の事には深く感謝している。お陰で姫を無事に護り抜く事が出来た。」

いかにもな感じの騎士鎧を着た男性が言った。しかし、感謝の言葉とは裏腹に、その手は腰の剣に添えられている。

「えっ、お姫さま！？ やつべえ……いきなりメインヒロイン登場じゃないk(ry」俺は興奮するバカを殴って黙らせてからグライアンさんに話しかけた。

『グライアンさん。俺達は……遠い日本という国からな旅人で、ある日不思議な爆発に巻き込まれて気付いたらこの近くの丘に居たんです。それで、その丘から城が見えたので、そこに向かおうとしたらこの戦闘に遭遇したんです。』

俺はなるべく不自然が無いように説明した。いきなり異世界から来たと言っても信じてもらえないだろうから……。

「ふむ……しかし、先程の戦闘での戦いっぷり、相当の使い手と見える。良ければ君達のステータスを見せてもらえないか？」

それくらいなら……と俺達4人はステータスを開いた。すると……

「……っ！？その若さでこのレベルとは……特にLv64など我が国でも存在しない。50代がせいぜいだろう……」

グライアンは自分の見ているものが信じられないようだった。

「なんて凄い高レベルだ！」

「これなら一人で竜騎兵と渡り合えるぞ……」

他の護衛の兵士も自分達より年下で高レベルなタツヤ達にざわついている。

「それにクラス（兵科）も見たことが無いものばかりだ、余程軍事に長けた国なのだ、そのニホンという国は……」

そんな事を話していると、大破した馬車の方から一人の少女が脇に護衛を携えて歩いてきた。

「グライアンさん、この方達が私達を救って下さった方々なんですか？」

声の主……少女は見事な姫様だった。城からの逃亡でそのドレスこそ多少汚れてはいたものの、身に纏う気品は王族のそれで……まあ、ぶっちゃけ気の弱そうな正統派お姫様って感じた。

「姫、ご用があればこちらから伺いますと言いましたのに……、全く姫は人が良すぎます。」

グライアンが苦笑しながら言った

「ともあれ、この者達が今回我々を助けてくれたのです。お陰でわが隊は姫様を御守りする事が出来ました。」

「そうですか……………本当にありがとうございます。」

姫様が改まってお辞儀してくれた。

『いえ、俺達は偶然通り掛かっただけですし？』

「それに、襲われてる人を見て平気ではられません。」

俺と隊長が言うと

「皆さんご立派ですね。あっ！自己紹介が遅れました。私、リディアス王国第一王女のフローラ・リディアスと申します。以後お見知りおきを」

姫様が自己紹介してくれたので、俺達4人も軽く自己紹介をすませた。無論リヨウスケが無駄にアピールしようとして盛大に滑った事は言うまでもない。

取りあえずは姫様も救い出すことも出来たし、これで一件落着だ。

まあ、これからまた何件も事件は発生するだろうがな……………

t o b e c o n t i n u e ……

第一撃（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第二撃（前書き）

第二話です。

第二撃

「第二撃」

先の一件は片付いてから俺達は負傷者を治療したり、フローラ姫達の素性を詳しく聞いたりしていた。

それによると、フローラ姫達は公務で国境近くの砦に視察に来ていたところに突然隣国のゲツヘル皇国が侵攻してきたのだそうだ。突然の奇襲に砦の防衛隊は成すすべも無く壊滅したそうだ……。

そこで親衛隊は姫だけでも逃がそうと単隊落ち延びたそうだ。

しかし、敵も元々姫の視察の日を狙って侵攻したらしく、激しい追撃によって元は30人程居た親衛隊も今は10人にも満たない……。

激しい攻撃で馬車も破壊され、絶体絶命のところに俺達が現れたらしい。

「しかし、グライアンさん。これからどうなさるおつもりですか？馬車も大破していますすし……」

「どこに行くにしても、移動手段が無いと」

「さっきの奴らがまた襲つて来ないとも限らん」

俺達は親衛隊長に尋ねた。

「もちろん王都まで姫様を護衛するつもりだが……君たちの言つたとおり移動手段も戦力も減少している現状ではかなり辛い状況だ……」

グライアンさんが困り果てた顔で言った。

それを聞いた俺達4人は顔を見合わせて小さく頷いた。

そして代表で俺がある提案を口にする。

『グライアンさん。もし良ければ俺達も王都まで一緒にさせてもらつて良いですか？』

それを聞いたグライアンさんや姫様、親衛隊の面々も面を食らったようだった。

「君達が力になってくれるのは確かにありがたい。しかし、これ以上無関係な民間人を巻き込むのは……………」

彼なりに親衛隊としての誇りとかプライドがあるのだろう、やや渋った。

しかし、今の俺達にはこの世界での知り合いは彼らしか居ないのだ。さっきの撃退した奴らとは今更仲直りは出来ないだろう。元々する気は無いがねww

なかなかOKをくれないグライアンさんにオレはこう切り出した。『グライアンさん。ではこうゆうのはどうでしょう。俺達が車輛を提供しますから、グライアンさん達は王都まで俺達を案内して下さい。これなら取り引きだから良いでしょう?』

「その提案は願ったり叶ったりだが……………君達は肝心の車輛を持っていないんじゃないか?」

提案は快諾してくれたが、グライアンさんは疑いの目を向けた。それもそうだ、見た目が徒歩の俺達が車輛を提供すると言っているのだから無理も無いだろう。だが、俺達には車輛がある。

ここに来るまでに確めたが、支援物資や兵器は問題なく使えるようだった、現にリヨウスケはUAV（無人航空機）を要請出来ていた。

『大丈夫ですよグライアンさん。宗さん、会長お願いします』

「分かりました」

「だから隊長と呼べと言っている!」

二人は無線機を取り出してそれぞれ車輛支援を要請した。10秒ほどするとどこからか飛行機のジェットエンジン音が聞こえてきた。

「来たようだな」

「ええ、そうですね」

上を見上げると一機のC-17輸送機がハッチを開放して何か大きな物を二つ投下して去っていくのがみえた。

「なんだあの鳥は!?!」

「何か落としていったようだぞ?」

親衛隊の面々が口々に言いながら落ちてくる二つの物体を眺めていた。

少しすると二つの物体はパラシュートを開き減速して近くの空き地に着地した。

「さあ、車輛の到着ですよ。行きましょう」

俺が皆を促して空き地の方へ連れて行くと、そこには無事に二両の戦闘車輛が着地していた。片方はハンヴィー高機動車で、もう片方はストライカー装甲車だ。どちらもカスタムしてある。ハンヴィーは上面のルーフにM134ミニガンとシールドを、ストライカー装甲車はRWS（遠隔操作無人砲塔）にM2重機関銃を装備している。

「おお、さっすが隊長と宗さん！俺達に出せない物を平然と要請してるぜ！そこに痺れる憧れるう〜！」

このバカのはしゃぎようはいつものことだが、実際二人とも凄い普通のプレイヤーならUAVやUGV（Gは地上用）だから車輛を持っていてる事自体がかなりのステータスなのだ。それに車輛は燃料や弾薬の補給に整備や修理などデメリットもあるのだが、二人はカスタムまでしてある。

特に宗さんのストライカー装甲車なんか今の俺には雲の上の存在みたいな物だ。

それに宗さんが持つてるビークルはこれだけじゃあない。実際に見たことは無いが、航空機まで持っているという噂である。宗さんが最古参プレイヤーなのに万年中尉なのはビークル集めに没頭しているからだろう。

「こ、これは………一体どうゆう物なのですか？私にはただの鉄の箱にしか見えないのですが………」

フローラ姫が申し訳なさそうに聞いてきた。確かにこの世界の人には変なの鉄の箱にしか見えないだろう。

「言葉で説明するより実際見てもらった方が良いだろう。百聞は一見にしかずと言うしな。ここで見ていてくれ」

そう言うと隊長はハンヴィーに乗り込んだ。キーを回すとディーゼルエンジンが唸りを上げた。姫様や親衛隊は突然変な鉄の箱から音がして驚いたようだったが、本当に驚くのはこれからだろう。

隊長のハンヴィーは俺達の横の道に入ると、どんどんスピードを上げていった。恐らく100キロぐらいは出ているだろう。普通のハンヴィーはディーゼルエンジンなのでこんなにスピードは出ないのだが、そこは隊長による改造の賜物である。

「そんなバカな！なんで馬の引いていない只の鉄の箱がこんなに速く走れるんだ！？」

「一体どんな魔法を掛けているんだ……」

うんうん、皆驚いてるね。まあそうだろう、動物がせいぜいのこの世界じゃあ時速100キロなんて未知の領域だろうからな。

「凄いな……先程から君達の国の技術には驚かせられてばかりだ」

「本当に凄いですね。これなら皆さんのレベルの高さにも納得がきます」

グライアンさんとフローラ姫も感心していた。

その様子を後ろから見ていた宗さんがフローラ姫達に声を掛けた。

「皆さん安心していただけた様ですね。では全員ご乗車下さい」

俺達は宗さんの指示でストライカー装甲車とハンヴィーに分乗した。

ちなみにストライカー装甲車には俺と宗さんと親衛隊が8人。ハンヴィーには隊長とリヨウスケと姫様とグライアンさん。

なぜ装甲の厚いストライカー装甲車の方にフローラ姫を乗せないかという……もし、敵が襲って来た時に、ストライカー装甲車を盾にしてハンヴィーを逃がすためだそうだ。

そして、今回の護送作戦は宗さんが指揮をとる。隊長よりも宗さんの方が経験があるからだ。

こうして俺達は王都へ出発したのだった。

第二撃（後書き）

いつも本作を読んで下さって本当にありがとうございます。

今回、皆様には今後登場してほしい武器や兵器のリクエストを受付たいと思います。

リクエストがありましたら感想の方へお書き下さい。

ご意見ご感想もお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8423y/>

ファンタジーな異世界でドンパチなう！？

2011年12月11日03時59分発行